

# ピラミッドをアルファベットで読み解く

## その1

太田 明

### 第一話

#### アルファベット26文字とは何か

#### 1. ピラミッドをアルファベット26文字で読み解く

西洋では、アルファベット26文字に数を割り当て、それらの組み合わせで人の運勢を占う、といった占術が昔から伝えられているそうです。しかしここに述べる数理は、そういった神秘的な数にはなんら関係なく、誰にでも出来る普通の計算です。

ただ、かなり奇妙な話になることは間違いなく、常識はずれの知識もずいぶん出てくることだと思えますが、その点あまり深く考えず気楽にお読みください。で、どういう話かという点、ピラミッドは「ピラミッドだ」ということです。

からかっているわけではありません。ちょっと聞いてやって下さい。ピラミッドを英語で書くと「PYRAMID」。ここで各文字に次の数を与えます。

P	Y	R	A	M	I	D
16	25	18	1	13	9	4

数字の意味が分かるように、文字を並べ替えると

A	D	I	P	Y
$1^2$	$2^2$	$3^2$	$4^2$	$5^2$

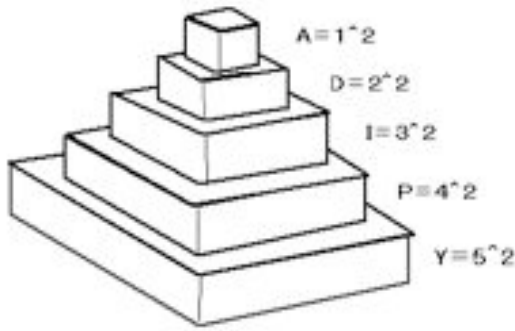
となります。AからYまでの数字はすべて

A	D	I	P	Y	M	R
1	4	9	16	25	13	18

と1から順番にきれいな平方数を構成します。

勘の良い人はすでに気づいていると思いますが、そうです、これらの数字はすべてアルファベット26文字の順序の数です。  
**A**は1番目、**D**は4番目でしよう。

なぜ「ピラミッド」は「ピラミッド」なのか、もうお分かりですね。1をサイコロ一個、つまり一つの



立方体と見て、**Y**の36個を正方形に組んでください。そしてこれを一番下の段として、残りの平方数を順番に積み上げて行ってください。

どうです、見事なピラミッドでしょう。

この四角錐がなぜ「ピラミッド」と呼ばれているのかは現在、まったく分かっていません。

「……の説が一番有力」なんてのは、何の根拠もありません。

また、この平方数のピラミッドは偶然なのかどうか、なんて小難しい議論も後回しにして、残りの**M**、**R**のことを考えてみましょう。この二文字の番号は平方数にはなっていないのですが、これがまた凄いです。

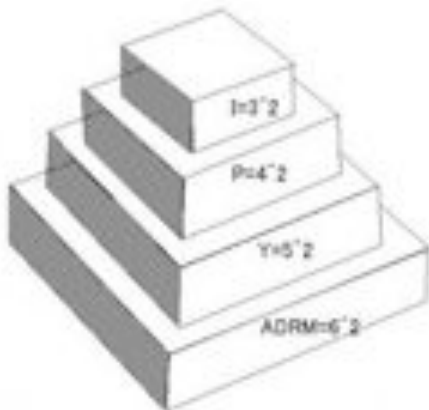
$$\begin{matrix} \mathbf{M} & \mathbf{R} \\ 13 & +18=31 \end{matrix}$$

**Y** || 36 || 次の平方数は 36 || 36 || です。この36は次のようにして作られます。

よって「**P Y R A M I**」  
**D**「全体は、次のように表すことができます。」

一番下の平方数が6の二乗、次に5の二乗、さらに4の二乗で、最後の3の二乗が頂上に来ます。頂

$$\begin{matrix} \mathbf{A} & \mathbf{D} & \mathbf{M} & \mathbf{R} \\ 1 & + 4 & + 13 & + 18 = 36 = 6^2 \end{matrix}$$



$$\begin{matrix} \mathbf{I} & \mathbf{P} & \mathbf{Y} & (\mathbf{A} + \mathbf{D} + \mathbf{R} + \mathbf{M}) \\ 3^2 & 4^2 & 5^2 & (1^2 + 2^2 + 18 + 13 = 6^2) \end{matrix}$$

上は平らになりますが、これは大ピラミッドの形状そのものです。

「ピラミッドの風景写真

<http://www.ourmystic.net/pyramid/>」

このサイトに大ピラミッドの写真がありますので、それを転載



大ピラミッド



階段ピラミッド

よう。つまり、アルファベットで記した「P Y R A M I D」の数理全体は、大ピラミッドの形状そのものを表しているということになります。

に注目すべきことが幾つかあります。

まず、エジプト三大ピラミッドの配置図の寸法に注目してください。それらは先に示した平方数の四つの数字「3, 4, 5, 6」そのものです。底辺の全長は6

ですから、その半分は3で、したがって半分の直角三角形各辺の比は「3:4:5」となります。

また、アルファベットの「P Y R A M I D」は、高さが4段、底辺が6個になっていますが、これは

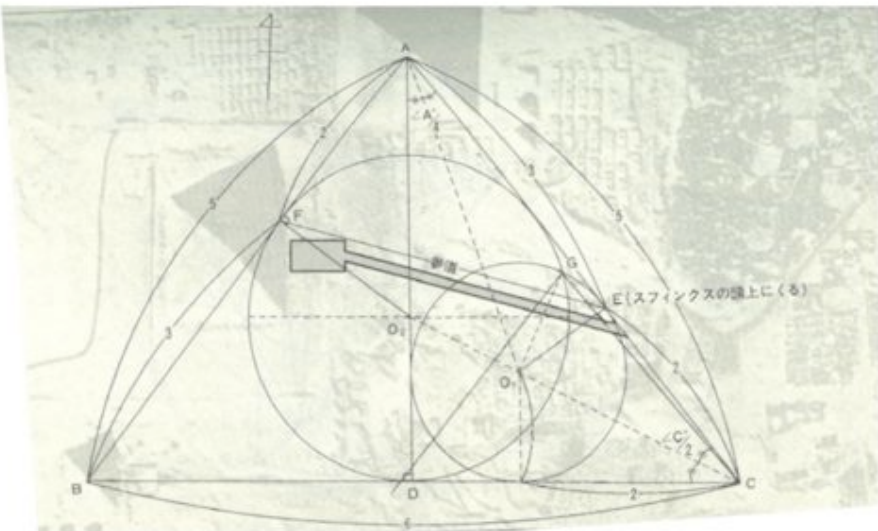
高さ … 底辺 4 … 6

で、第二ピラミッド

させていただきました。頂上が平らになっているし

それだけではありません。ここ

の断面図の高さと底辺の比となります。したがって、この「P Y



【写真は『日本古代遺跡の謎と驚異』(日本文芸社刊)より引用】

## 第二話

「RAMID」の文字列の数理は何故か、配置の寸法も含めて、第一、第二の複合ピラミッドを表現していることとなります。ここに第三ピラミッドも現われてくるのですが、それはまだ少し先の話になります。

最後に、私にもまだその意味するところがよく分かっていないのですが、誰かが何かに気づくことを期待して、先の3, 4, 5, 6が

$$3^3+4^3+5^3=6^3$$

になることを示しておきます。これは立方体の積み重ねですから、アルファベット26文字の「PYRAMID」は確かに、実際のピラミッドを暗示しているようではありません。

### 「PYRAMID」はアルファベット26文字のペールを剥ぐ

#### 1. 母音配置の謎

前節は、「PYRAMID」の数理はピラミッドの形状を表わしている、という話をしました。

でも実はこれ、ちよつと変な話なんです。Yは「Y=5」<sup>2</sup>としてピラミッドの五段目を構成していましたが、Yが25番目に置かれたのは、今から五百年ほど前のことなのです。アルファベット26文字は最終的に、V, W, Jの3文字が加わって完成しますが、この時にこの3文字がYの前に置かれたため、Yはこれ

らに押し退けられて25番目の文字となった訳です。つまり、Yは古くから存在していて「PYRAMID」の中に有ったとしても、五百年前までは、数理全体がピラミッドを表せるようにはまだなっていなかった、ということなのです。

では、「PYRAMID」の数理がピラミッドに組めるのはやはり、位置がズレたための珍しい偶然、なのでしょう。いや、でも、追加されたJ, V, Wの数理も

$$J + V + W = 10 + 22 + 23 = 55 \\ = 1^2 + 2^2 + 3^2 + 4^2 + 5^2$$

として五段のピラミッドになっていますから、もしかすると、悪戯好きの誰かが、暇に飽かして手の込んだ悪戯をやったのかも知れません。

そこで今回は、この「悪戯の手」の存在を実証できるのかどう

か、この点に焦点を絞って考えていくことにします。

\* \* \*

まず、アルファベット26文字を一行に並べてみます。

A B C D E F G H I J  
K L M N O P Q R S T  
U V W X Y Z

ここで母音五文字の配置に注目します。26文字の中でなんとなく等間隔に組み込まれているように見えますが、それほど正確でもありません。そこで、この母音を順序に従って左縦列に配列し、子音を横列に並べていくとたちまち、図1のような整然とした図が浮かび上がってきます。

図1

A 1	B 2	C 3	D 4		
E 5	F 6	G 7	H 8		
I 9	J 10	K 11	L 12	M 13	N 14
O 15	P 16	Q 17	R 18	S 19	T 20
U 21	V 22	W 23	X 24	Y 25	Z 26

これは別に私が第一発見者という訳ではなく、既に以前より指摘されていることです。その理由についても、音声学的に説明されてはいるようですが、数理とは違ってやはり、何処までも曖昧さの残るものです。

それにしてもなぜこんなに綺麗に並んでしまうのでしょうか？

私が調べた限りでは、26文字の成立途上において特に配列に手が加えられたという話はなく、その時々々の必要性から字母の取舍選択が行われ、図1の配列に固まっていた、とするのが現在の一般的な見方のようです。しかしこの整然とした配列は、なんとなく日本の五十音図を思わせ、何らかの意図を持って配列された、との感を強くします。

よく偶然かどうかを問うときに数学の確率を引っ張り出す人が居ますが、そんなものはまったくのナンセンスで、直感的にどう

捉えるか、これがすべてです。

で、私は、これを意図的な配列だと判断したわけです。そこでピラミッドの数理を睨みつつアルファベット26文字を分析していったところ、26文字の数理全体がなんと巨大？なピラミッドとして組み上げられていたので。それはとても偶然とは思えないほど見事なもので、しかも母音と子音とで別々にピラミッドに組まれているのです。

そこでまずは、子音のピラミッドからご紹介しましょう。

## 2. 子音のピラミッド

図1から母音の列を取り外して子音だけを見ると、図2-aのようになります。そこで試しに、子音一、二段目を一組のものとして、横の段ごとに順序数を合計すると、各段の合計がすべて30の

倍数として綺麗に、縦に並んでしまうのです。

図2-a

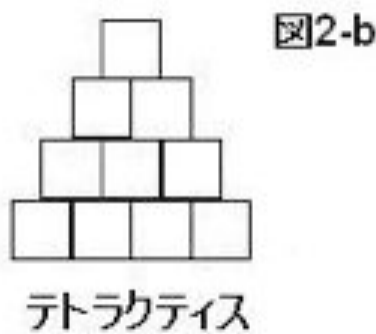
B 2	C 3	D 4	→ = 30		
F 5	G 7	H 8			
<hr/>					
J 10	K 11	L 12	M 13	N 14	= 60
<hr/>					
P 16	Q 17	R 18	S 19	T 20	= 90
<hr/>					
V 22	W 23	X 24	Y 25	Z 26	= 120

母音の位置が一文字でもずれると、この倍数関係はたちまち雲散霧消するのですから、この子音の数理構造は、母音の配置に依存しているといえます。

ところが驚くなかれ、この子音の倍数値の配列はなんとそのまま、ピラミッドとして成立しているのです。

読者は、ピタゴラスのテトラク

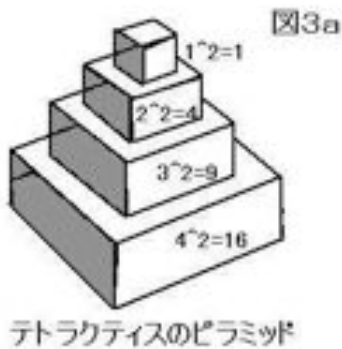
テイスというものをご存知でしょうか。図2-bがそのテトラクテイスです。この図はたまたま正方形を積み上げてはいますが、形は星形でも何でもよく、このように1・2・3・4と順番に三角形四段に組み上げたものを、こう呼ぶのだそうです。



このテトラクテイスは平面形ですので、正方形の総数は10個になります。これをこれまで同様立体的にピラミッドと見ますと、その数は次のようになります。

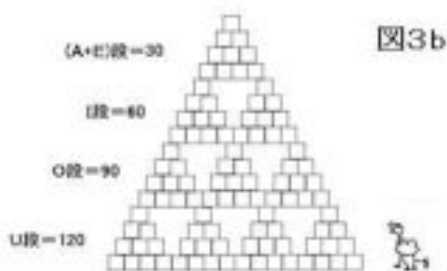
$$1^2 + 2^2 + 3^2 + 4^2 = 30$$

これは図2-1 aの一、二段6文字の合計に当たりますから、つまり一、二段目の合計は、図3 aのように、テトラクティスのピラミッド

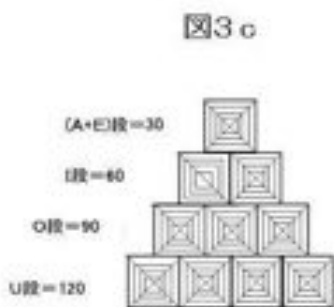


テトラクティスのピラミッド

ドになつてゐるわけです。ということ、すべての段をそのまま順序に従つて積み上げていくと、図3 bのようになります。また、各



子音全体のピラミッド



段の先端を横倒しにして積み上げると、図3 cとなります。

ただし、30の塊は立体ピラミッドですが、それをテトラクティスに積んだ全体は、平面形、といふべきなのでしょう。

ともかく、子音全体がピラミッド、これが子音の数理的意味です。もちろんこれは、26文字あつての話ですから、もしもこれが人の手になるのなら、その何者かは、26文字全体を意識しつつ母音の配置を決めていった、ということになります。

「アルファベット26文字は、人間の長い言語活動の必要性から出来上がったものではなく、数理のピラミッド構造を意識して組み上げられている」  
これが私の見解ですが、如何でしょうか。

### 3、母音の中抜け。ピラミッド

次は、母音のピラミッドです。この配列の謎解きの鍵の一つは、前回の「P Y R A M I D」の中にあります。

そこでは、 $1^2 \sim 5^2$ までの平方数がすべてA～Yまでの一文字に割り当てられていました。これがそのまま五段のピラミッドであつたわけです。

A	D	I	P	Y
$1^2$	$2^2$	$3^2$	$4^2$	$5^2$

これと同じことが母音の中にも見られます。

その母音の数理を調べると、

A	E	I	O	U
$1=1^2$	5	$9=3^2$	15	21

となつていますが、このうちAとIは「P Y R A M I D」の「A, D, I, P, Y」の中に含まれていました。つまり、この二文字の順序数だけが単独で平方数になっているわけです。ところが、残りのE, O, Uのうち、Eを $E \parallel 5 \parallel 1+4$ と

分割し、1をO $\parallel 15$ へ、4を

U $\parallel 21$ へと振り分けると、

$$1+(O)15=16=4^2$$

$$4+(U)21=25=5^2$$

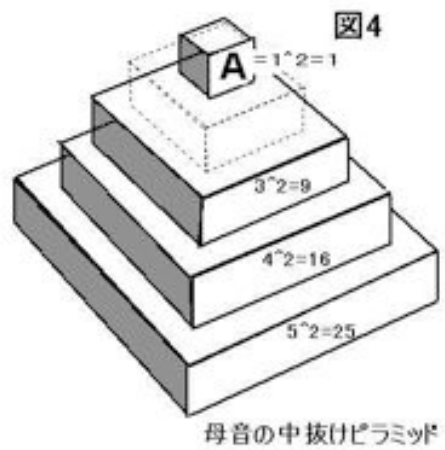
となつてうまく平方数ができます。これにより、母音五文字の数理全体は

$$A \quad I \quad 1+O \quad 4+U$$

$$1^2+( )+ 3^2 + 4^2 + 5^2 =51$$

と、 $2 \parallel 4$ の抜けた四つの平方数に分割できますので、これをピラミッドに組みあげると、図4のように、二段目を抜き去った五段の中抜けピラミッドが完成しま

す。



ここでA $\parallel 1$ はてっぺんに来ます。「P Y R A M I D」の五段のピラミッドのてっぺんもA $\parallel 1$ になっていましたが、それがA $\parallel 1$ のもっとも自然な場所、ではないでしょうか。それにしても、子音のテトラクティス四段ピラミッド、そして母音の「4」抜けた五段ピラミッド構造。これはいったい何なのではないか？

#### 4、米国王璽の秘密

ここで「ちよつと待て、二段目は無いのだから、中抜けにする必要はなく、一段目は三段目の上に載せて四段ピラミッドとすべきだろ」との疑問を持つのは、常識人として当然のことです。

しかし陰謀論好きな人たちにとっては、この形になる必要があるはず。彼らも、こういうものが実際に現れるとは考えもしなかつたでしょうが、この二段目が空白になったピラミッドは、陰謀論者の象徴のようなものです(笑)。実は斯く言う私自身も、このピラミッドは「それ」を意味していると考えています。

図5



どうです、図5のピラミッド。母音の中抜けピラミッドそのものでしょ！

実は、この中空の目のことを「すべてを見通す目」と呼んで、特別視している人たちが居るそうです。

この図案は米回国璽の裏面に描かれているものですが、一ドル紙幣の裏に、国璽と共にそのまま挿入されています。この二つの図案を描いた人は、米国防務省によれば、紋章学の権威ウィリアム・バートンという人だそうです。

もしもこの図案が事実、アルフ

アベットのピラミッド構造にリンクしているのなら、アルファベット26文字が先に在るのですから、この図案がアルファベット26文字を指している、ということになります。

ここで、その一例を示しておきましょう。

国璽の図案として白頭鷲が描かれています(図6)。この特徴を米国防務省のホームページから抜粋すると——頭の上は13の星をいたたく栄光。右の爪は平和を象徴する13枚の葉が付い



図6 米回国璽

たオリーブの枝を掴み、左の爪は

戦争を象徴する13本の矢を掴んでいます。そして尻尾の9枚の羽は最高裁を表しています——となりますが、これらの数字も、アルファベット26文字の数理と次のように符合します。

(13星+13葉+13矢)\*  
9羽 || 3 5 1 || 1+2+3+...:  
+24+25+26

3 5 1は、アルファベット26文字の全合計数です。その数理構造が、国璽の特徴的な数字に符合するのです。この白頭鷲の図案は小さくて見難いのですが、頭上13の星が形作る六芒星は、二組のテトラクティスを上下逆向きに組んだものです。テトラクティスは子音のピラミッドを解く鍵でしたが、ここで図案に「鷲」が選ばれたのは、その意味をさらに具体化するためではないでしょうか。

鷲 || E A G L E || 5 + 1 + 7  
+ 1 2 + 5 || 3 0 || テトラクテ

イスのピラミッド(図3a)

テトラクティスのピラミッドは子音の核(\*図案の中心)で、その数は厳密に30です。また裏面のピラミッドは母音の中抜けピラミッドに符合していました。そのピラミッドになぜ「目」があるのか? それはこうです。

E Y E ↓ E \* E || Y ||  
5 \* 5 || 2 5

母音の中抜けピラミッドの一番下の段は25で、5 \* 5 || 2 5に組まれていました。この「目」は「すべてを見通す目」とされますから、てっぺんにあつて、一番下の数理構造まで「すべて見通しているのでは……」

つまりこの国璽裏表の図案は、どういうわけなのか、アルファベット26文字の数理構造を解くための、鍵とも言える特別な暗示的要素をその中に幾つも含んでいるのです。



この悪戯好きの「彼ら」はいつたい、何者なのか。実はそれらしきものも示されてはいるのですが、そこに到るまでにまだ幾つもの難関を超えていかねばなりません。中でも、英語が分からないというのが私にとつての最大の難関ですので、もしかすると、読者に手助けをお願いするやも知れません。その節はよろしくお願いたします。

おそらくは、ほとんどの人が何の疑問も感じなかったであろうアルファベットの母音の配置。アルファベット26文字は単に言語を表現するための字母の役割でしかないのか。それとも、世に知られていない何かを秘匿するための暗号システムでもあるのか。興味は尽きません。

この話はまだ何回か続きます。次回は四カ月先となりますので、それまでに一つ知恵を絞っていただきたいことがあります。

それは、星条旗の図案の意味です。星50個は州の数を表す、なんて試験の模範解答のようなものは要りません。かのアルバート・アインシュタイン博士も「常識とは十八歳までに身につけた偏見のコレクション」という言葉を残しています。正統派陰謀論者の仲間入りをしようと思うのなら、星条旗が図1の図案であることぐらいは、見抜いてください。では、次回をご期待ください。

【第一、二話 完】